

— 中学の授業はこう変わる —

中学の授業の変化を高校の授業に生かすために



都立両国高等学校附属中学校

山本 崇雄

1. はじめに

今回の指導要領の改訂で、中学の英語授業はどのように変わっていくのであろうか。高校の先生方にとっては高校1年生の指導方針にもかかわることで、関心も高いのではないだろうか。中学校で伸ばした力を高校でさらに伸ばし、不十分な点を高校で補っていくといった理解ができると中高の接続はスムーズになる。現在の中学校の英語授業の実態をふまえつつ、新指導要領をきっかけに中学の英語授業がどう変化し、どのような力を持った生徒が高校に入学してくるのかを、期待を込めて述べていきたい。

2. 中学校の授業では…

中学校の授業と聞くと、どのような授業を想像されるであろうか。高校の先生と話をすると『「聞くこと」「話すこと」が中心で、「文法」や「書くこと」がおろそかになっている』といったイメージが大きいように感じる。実際に中学校ではどのような授業が行われているのかは、中学校の経験が長い私にとっても、実は分からないことが多い。それくらい、中学校の英語の授業は一教員の裁量によって大きく異なっているのが現状だ。よって生徒の英語の力も多様化し、そのことが高校1年の指導を難しくしている。

中学校の英語授業を一般化することは難しいが、中学校の英語教育の実態をつかむために行わ

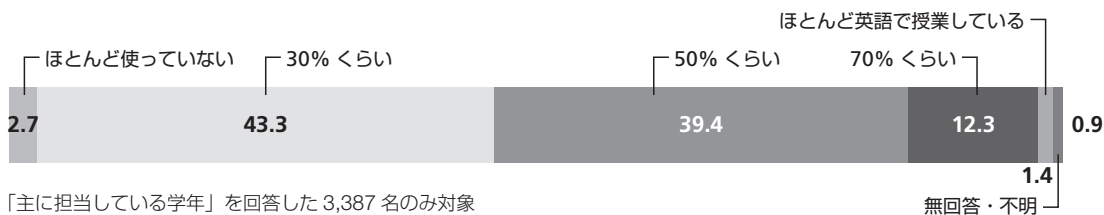
れた「第1回中学校英語に関する基本調査」は大変参考になる。この中に興味深いデータがあった。

一つは中学校英語授業での英語使用割合である。(下図参照) この結果から、ほとんど英語で授業をしている先生の割合がわずか1.4%と非常に少なく、授業の半分以上を日本語で行っている先生が多いことが伺える。さらに、教員の年齢が上がるにつれ、英語が使われる割合は減っていく傾向にある。次に指導方法の実態についてのデータも興味深い。授業内容でよく行うものとしては「音読指導」(87.8%)に続き「文法指導」(71.1%)があげられ、「ゲーム」(24.3%)や「スピーチ・プレゼンテーション」(5.1%)は下位である。ここから、日本語が意外に多く使われ、文法指導も多く、スピーチやプレゼンテーションの時間が少ないという実態が見えてくる。この実態をしっかり高校の先生に伝えると共に、新指導要領で中学校の授業が変化する点も高校から見えやすくする必要がある。

3. 新指導要領が中学の英語授業を変える

新指導要領で述べられている「コミュニケーション能力の基礎」を育てるには、どの学校でも「聞く力」「話す力」をしっかり育て、それを土台に「読む力」「書く力」そして「文法を理解する力」につなげていく指導が求められている。

英語使用割合 (%)



しかしながら、前記の調査の結果からも、中学校の指導方法は多様化しており、すべての学校で「コミュニケーション能力の基礎」を育てきれていると言えないのが現状だ。中学校では、高校にスムーズにつなげるためにも「コミュニケーション能力の基礎」をしっかりと育てなければならない。このゴールに向かっていくため、新指導要領では様々な工夫が行われている。その中で、次の3点に注目し、中学の授業がどう変化していくかを述べていきたい。

ポイント① 週3時間から4時間へ

授業時数の増加（各学年とも年間105時間から140時間に増加）

ポイント② 4技能のバランスをとった活動

「聞くこと」、「話すこと」に加え、「読むこと」、「書くこと」の重要性を明示。

ポイント③ 「発信力」の育成

全教科にわたって強調されている「思考力・判断力・表現力」を育成することを目指し、英語で「発信する力」を育てる。

4. 新指導要領ポイント①

～授業時数が増え、授業はこうなる

本校はカリキュラムの中で「英語によるコミュニケーション能力の育成」を掲げ、すでに週4時間体制で英語の授業を行っている。本校での取り

組みを例に、週3時間から4時間に増えると授業がどう変わるかを述べていきたい。

本校での授業の持ち方は以下のようになっている。

どの学年も週3時間を教科書を使った基本的な授業、1時間をスピーチやディベートのような発展的な発表活動の時間にあてている。週4時間になると、1時間を発表活動の時間として使いやすくなり、「話す力」を伸ばす発展的な活動が期待できる。この時間が充実すると、スピーチなどの原稿を書くことによって「書く力」を、発表を聞き要点をメモすることにより「聞く力」を伸ばすことにつながる。

このように、発表活動の時間が保証されると、「まとまりのある一貫した文章」を話したり、書いたりする経験を持った生徒が増えることが予想される。高校でもこうした発表の機会を与えていただくと中高の連続性が出てくる。

5. 新指導要領ポイント②

～4技能+1を伸ばす授業とは

週3時間では教科書指導もなかなか余裕をもって取り組めないという声はよく聞く。多くの学校が、教科書の理解から音読、最後に文法の確認で終わることが多いようだ。週4時間になれば教科書指導にも余裕ができ、表現活動を取り入れるこ

		必修週4時間			
		1	2	3	4
中1	時間	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	授業形態	A先生		A先生+C先生	C先生+ALT
	担当	教科書を中心とした授業			
	内容	Speech, Skit			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			
		必修週3時間			全員選択週1時間
中2	時間	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	授業形態	B先生		B先生+A先生	A先生+ALT
	担当	教科書を中心とした授業			
	内容	Speech, Skit, Debate			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			
		必修週3時間			実践英語週1時間
中3	時間	JTE		TT (JTE) or 少人数	TT (ALT)
	授業形態	C先生		C先生+高校籍の先生	B先生+ALT
	担当	教科書を中心とした授業			
	内容	Speech, Skit, Debate			
	使用教材	教科書、Let's Enjoy Bingo, たてよこドリル、Basic Grammar in Use			

とが可能になる。この表現活動が、4技能を総合的に伸ばすための土台になると考え、本校では週3時間の教科書の指導の中にOral Presentationという表現活動を取り入れ、4技能の総合的な育成を目指している。(下図参照)「書くこと」「読むこと」を充実させ、力を付けさせるには、その他の技能(特に「話すこと」「読むこと(音読)»)が土台になり、4技能のバランスをとっていくことが肝要なのである。

<教科書を中心に4技能を育てる>

Oral Presentationは、教科書の内容をリプロダクトし、絵を使って発表する活動である。発表の中では、聞き手に質問をしたり、自分の意見や考えを述べたりする。また、'○○ said○○ but I think ○○.' や 'I agree with ○○.' といったスピーチやディベートにつながる表現も計画的に導入し、週1時間のALTとの発表活動の時間の土台も作ることができる。感想や自分の考えを言うためには、本文の内容をしっかりと理解しなければならない。発表のために何度も教科書本文を読み直し、意味の分からない表現はしっかりと調べるようになる。また、キーセンテンスや5W1H

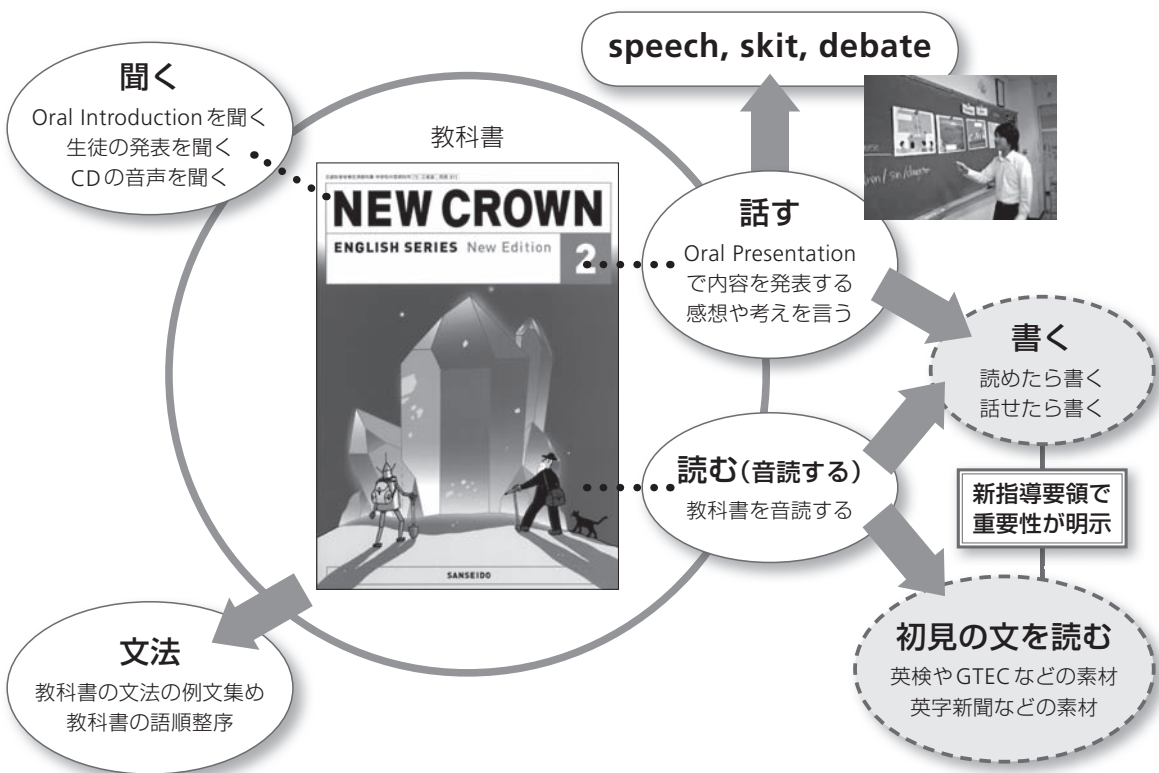
や代名詞を的確につかむことができるようになるため、初見の文章でも内容を素早く理解することにつながる。教科書の指導のゴールに表現活動を入れることによって、結果的に4技能を総合的に伸ばすことにつながるのである。

このような活動を経験する生徒が増えれば、高校でもリーディングの授業などで、絵を使って内容をリプロダクトさせたり、感想や意見を言わせたり、英語で要約させたりと発展的な活動につなげることができる。

このような力は大学入試の自由英作文でも求められる力であり、実際に東京大学では過去に右ページ図のような出題があった。

これらは中学校でも教科書のOral Presentationから発展できる活動である。

授業の内容を正確に理解し<情報を収集する能力>、適切な英語を用い<情報を発信する能力>、そして内容についての自分の考えや感想を述べる<情報を検証、評価する力>といったいわゆるPISA型読解力で求められる力は、4技能の育成と共に意識して育てていかなければならない第5の技能と言ってもよい。





次の絵に描かれた状況を自由に解釈し、30～40語の英語で説明せよ。(2005年前期日程)



次の絵に描かれた状況を自由に解釈し、40～50語の英語で説明せよ。(2008年前期日程)

6. 新指導要領ポイント③ ～「発信力」の育成

「発信力」を育てていく土台を、教科書を使った授業で築いていき、その先にディベートなどの骨太で実践的な活動に挑戦させたい。昨年度、中学3年生では‘All junior high school should serve school lunch’という論題でディベートに挑戦した。準備の過程では、＜情報を収集する能力＞として様々な検索を行い、＜情報を発信する能力＞として適切な英語表現を学び、＜情報を検証、評価する能力＞として、自分たちや相手の情報や論拠の信憑性を考えることを繰り返した。3年間 Oral Presentation で鍛えた力をディベートという実践の場で生かすことになる。3年間の積み重ねを自信に、彼らの発する英語には力があり、自信に満ちあふれた態度で気持ちよさそうに英語を話していたのが印象に残っている。

全ての学校でディベートを行うのは難しいかもしれないが、＜情報を収集する能力＞＜情報を発信する能力＞＜情報を検証、評価する能力＞を意識したスピーチなどの発表活動を目指したい。

高校でも、これらの力を意識した論題を使ってスピーチやディスカッションを行うと、中学との連続性が出てくる。ここでも、大学入試の自由英作文のテーマが使える。例えば2008年の東京大学の前期日程では「今から50年の間に起こる交通手段の変化と、それが人々の生活に与える影響を想像し、50～60語の英語で具体的に記せ」といった問題が出題されている。このような問題を参考に論題を選ぶと、大学入試ということもあり、生徒の動機付けにもなる。

7. 一貫した英語教育を目指して

本校では、中学の英語担当の教員3名は全員、同じ目標、指導手順でほぼ英語で授業を進めてきている。表現活動を重視した授業形態だが、GTECや英検の結果を分析すると、どの学年も、「聞く力」に加え、「読む力」や「書く力」が大きく伸長している。結果的に4技能のバランスがとれた状態で高校に送り出すことができた。文法項目の整理や長文の精読など、中学で欠けている項目については高校の先生に引き継ぐことができている。このように、生徒が身に付けている力が見えてくると学校間の接続はスムーズになり、入口での指導方針や目標を決めやすい。

つまり、中高だけでなく、小中高大といった全ての学校間がスムーズに接続するためには、どんな英語の力を児童、生徒、学生に付けさせたいかを Can Do としてお互いに目に見える状態にする必要があるのである。新学習指導要領にはその道標としての役割を期待したい。また、それぞれがお互いの Can Do や授業を知ることによって、入口と出口の授業が連携を意識したものによっていき、一貫した英語教育の姿が期待できる。それに伴い、中学の英語の授業が変わっていき、高校へとスムーズにつながるものになるよう努力していきたい。

【参考文献】

「第1回中学英語に関する基本調査」
(2009 ベネッセ教育開発センター)
http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/kyouin_soku/index.html
東京大学入試問題 (2005年、2008年)

